

タイトル	一八七二年十二月三日のこと
著者	桑原，俊一； KUWAHARA, Toshikazu
引用	年報新人文文学(7)： 2-5
発行日	2010-12-25

一八七二年十二月三日のこと

桑原 俊一

「何事にも時があり、天の下の出来事にはすべて定められた時がある。
生まれる時、死ぬ時……」『コヘレトの言葉三章一―二節』

その一。今日のアッシリア学（古代メソポタミアの文化研究を総称する）の確立には楔形文字の解読を待たなければならなかった。西アジア（日本でいまだ西欧中心主義に起因する「中近東」「近東」などという言葉が新聞報道等でも闊歩していることに憂鬱と悲哀とがつのつてくるばかりである）が注目される時期は、一九世紀中葉以降になってからである。西欧諸国がこの地域の政治的支配を確保していたこともあって、発掘された出土物は大型のものから粘土板断片にいたるまでほぼすべて西欧の博物館に収蔵されることになってしまった。ヨーロッパ文化はギリシア・ローマの知性や『聖書』文学にその本質を委ねるユダヤ・キリスト教の宗教感情に基盤を持つとされてきた。しかし歴史は大きく舵を切ることになる。一八七二年一月三日のこと、大英博物館アッシリア学部門の助手であったジョージ・

スミスが聖書考古学協会で論文を発表したのであるが、それは天地を震撼させるほど強烈なインパクトを与えるものであった。なぜなら西欧以外の辺境の地から明らかにノアの方舟物語の原型とも言うべき文書の存在が明らかにされたからである。翌年スポンサーを得たスミスはすぐさま現地に赴き二度にわたる幸運を得ることになった。ギルガメシュ叙事詩の十一の書板の断片、つまり彼が発表した洪水物語の欠損部分を補完する部分に出会うことになったのである。それは欧米文化の根幹を揺るがす歴史的出来事であったのである。西欧文明の遙か以前に高度な文化・文明を確立した楔形文書群がにわかにクローズアップされることになった。以来、キリスト教文化圏は西アジアへ敬意を払う一方で、異教との間で政治的・宗教的溝を深める結果になってしまったことは皮肉なことである。

爾来一五〇年、西アジアの諸学は、欧米から疊惑の地とされた西アジアが古来いかに豊饒な文化を構築してきたか、を明らかにしてきた。しかし今日ヨーロッパと非ヨーロッパないしオリエント等といった二項対立概念によって歴史・文化を分断して論じられることがいまだ克服されていないことは残念である。

その二。人はことば（音声記号）を文字（表意記号）化することで歴史的な大転換期、つまり時の機軸を持つことになった。それによって人間はさらに理性的思惟を表出できる一かけらの存在になったといえよう。一八七二年一月三日に先立ち、欧米人が驚かされたのは、紀元前三〇〇〇年紀に遡る楔形文字の発見であった。文字装置の発明は疑いなく人類史の基軸のひとつであろう。多くは手の平にのるほどの粘土板に主として筆を尖筆として楔形の陰影を刻印し文字とした。楔形文字の場合、絵文字（アイコン）から線状化と簡略化が進み、時代と地域によって変容し、漢字仮名交じり文のようなアッカド語

の文字組織（音節文字）として確立した。意外に古代の文字は複雑な組織を備えていたようである。お馴染みのエジプトのヒエログリフ（聖刻文字）は紀元前三〇〇〇年紀からほぼ三〇〇〇年間その形象を變容することなく使用されていた。いずれの古代文字も六百ほどの文字記号から構成されている。漢字文化圏の私たちには決して多い文字数とは思われないが、いずれにせよ記号の読み方や形状は時代や地域によって異なり複雑で一定の期間訓練を受けることなしにことばの使い手、書記（当時のエリート官僚）には成りえなかったのである。

さて英語を始めインド・ヨーロッパ語族の文字はその起源を古典ギリシア文字にまで遡ることはよく知られている。しかしアルファベットの歴史を辿ってみると、その案出の道程は決して単純なものではなかった。人間のことばと文字に対する知性の飽くなき探究心や好奇心なくして存在しえなかったであろう。いまだ研究者の間でさえ古典ギリシア文字の起源をめぐる議論は一致を見ているわけではない。ただ言えることはアルファベット文字の誕生は少なくとも紀元前九世紀以降であるのでギリシア周縁諸国の文字文化を基盤にして発案されたことだけは確かであろう。つまりすでに前述したようにメソポタミアの文字（楔形文字）とエジプトヒエログリフ文字の二系統から生み出されたと結論できよう。複雑だった楔形文字も紀元前一四世紀には三〇個（古代ウガリット都市国家の文字）ほどの楔形文字になっていた。パレスチナ周辺の人々（古代フェニキア人たち）はエジプトとの交易を通し、またその地で傭兵や労働者として働くうちに紀元前一五世紀頃にはヒエログリフを簡便にした二十二の子音文字で表わすことに成功していた。こうして地中海東（西アジア）に拓かれた文字文化はやがて古典ギリシアアルファベット文字として結実し、さらなる発展をみることになる。現代のアルファベットは各ヨーロッパ

諸語の音韻に合わせて変化・変容を遂げ、今日の諸文字へと分岐してきたのである。

(くわばら としかず・北海学園大学教授)